

断崖の先に広がる大海原。水平線の先、一体どこに向かって船を漕ぎ出せば良いのか。
古代の船人は、たとえようのない怖れを感じたことだろう。

水平線にかすかに見える沖ノ島は、あまりに小さくて心細い。しかし、その島影こそが唯一の航海の道標なのだ。
その島は、きっと我々を導いてくれる。そう信じずにはいられない。

それは「神宿る島」だから。

宗像大社は、沖津宮(沖ノ島)、中津宮(大島)、辺津宮(九州本土)三宮の総称で、沖ノ島での祭祀を起源としています。



大島の遥拝所から沖ノ島を望む



4世紀中頃、すでに大陸(朝鮮半島)との活発な海上往来が記録されています。

沖ノ島は、日本列島と朝鮮半島の間、宗像から北西60kmの洋上にある孤島で、日本から大陸への航海における道標であるとともに、その荘厳な外観から、神宿る島、として古代船人の信仰の対象となってきました。

この海域は、航海術に長けた豪族の宗像氏が古代より支配しており、沖ノ島での祭祀を執り行ってきました。

記紀神話に取り込まれた地域神・宗像三神

沖ノ島では、4世紀から9世紀にかけて、航海の安全を願う自然崇拜に基づいた露天での祭祀が行われてきました。

祭祀跡は、その隔絶した立地や入島を制限する禁忌により、ほぼ手付かずの状態に残されています。発掘調査で見つかった約8万点の祭祀奉獻品には、新羅や唐の金物細工だけでなく、シルクロード経由のガラス片までも含まれ、古代に大陸と活発な交流があったことが伺えます。

7世紀後半には、露天での古代祭祀は、中津宮(大島)と辺津宮(九州本土)でも行われようになり、いまでも、その祭祀跡(下高宮祭祀遺跡)を見ることができます。

9世紀末に沖ノ島での祭祀が終焉した後も、島そのものが信仰の対象であり続け、中世には、沖ノ島を望む大島や九州本土に社殿が造営され、現在の三宮が整えられたようです。

宗像大社の祭神は宗像三女神。記紀神話では、宗像地域から朝鮮半島に向かう海域を守る神とされました。

記紀神話に登場する神々の多くは、各地の豪族が祀っていた神が、中央集権国家ヤマト王権の神話に取り入れられ体系化されたものです。宗像三女神も、元来は地方豪族の宗像氏が祀っていた神でしたが、対外交流の重要な航路となる海域を守る神として、天照大神と結びつく国家神道に組み込まれていったようです。



神宿る島を崇拝する伝統が、古代東アジアの活発な対外交流の中で発展し、今日まで継承されてきたことが評価され、2017年に世界遺産に選定されました。



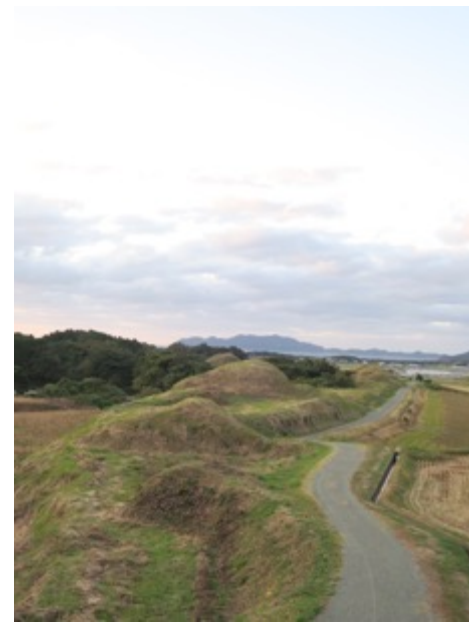
沖ノ島 露天での古代祭祀跡
「世界遺産への記載推薦書」から転写



古代祭祀跡から出土した奉獻品
宗像大社宝物館の展示品



下高宮祭祀遺跡(辺津宮の露天祭祀跡)
宗像山中腹にあり、いまでも神事が行われる



新原・奴山古墳群
宗像氏の墳墓で大島を望む高台にある